



十六面・葉王寺遺跡第50次調査出土 石塔笠部(上) 宝塔 塔身(右)

出土した石塔部材は、火山礫凝灰岩からつくられたもので、平安時代末～鎌倉時代初め頃の製作と推定されます。



香川県さぬき市 火山(津田の松原海岸から)

香川県の火山は平安時代から鎌倉時代にかけての有力な凝灰岩の産地でした。海岸に近く搬出に便利だったのでしょう。



みやこ 宮古出土泥塔

宮古集落の北東で、泥塔が多数出土しています。高さ10cm前後の外型づくりで、底に穴があるものが目立ちます。経塚の埋納が流行した平安時代後期頃に、多数の泥塔を埋納する行為もおこなわれたようです。



参考・鞍馬寺境内出土の宝塔(平安時代)
写真協力:鞍馬寺
鞍馬寺本堂付近の経塚上に置かれていたという香川県火山産の凝灰岩でつくられた宝塔。



唐古・鍵遺跡出土 平安時代後期～鎌倉時代はじめの土器

上は田中庄の屋敷地部分の59次調査で確認した井戸出土白磁碗(11～12世紀)と5次調査井戸出土黒色土器碗・土師皿(10世紀)です。下は26次調査で木製榼とともに出土した12世紀の瓦器碗です。

「田中庄」と在地領主のはじまり

弥生時代の集落遺跡として有名な唐古・鍵遺跡ですが、重複して中世の豪族居館とされる遺跡も確認されています。

唐古池の東側には20m四方の畑地などが点在する区画があり、中世の文書にみられる「唐古東」氏の居館跡と推定されています。この城館跡とみられる遺構が広がる地区の小字名は「田中」といい、延久二(1070)年の興福寺の荘園を記録した「興福寺大和国雑役免坪付帳」という文書から「田中庄」という荘園が周囲に広がっていたことが判明しています。荘園の領域が比較的まとまっていることから、在地有力者が円田化(散在していた荘園を一つの地区にとりまとめていく行為、私領化につながる)を順調に進めていたことがわかります。

この荘園は、長保元(999)年に田中庄荘官である文春正ふみのはるまさという人物とその一党が大和国司の使者を殺害する、という事件の舞台となり、その記録が残ったことで関係者の名前が現代に伝わる貴重な例となっています。なお、この時の田中庄の名目上の荘園領主となっていたのが紫式部の夫として知られる藤原宣孝ふじわらののぶたかです。

1070年段階には、貴族の衰退と興福寺勢力の伸長の影響からか、興福寺を荘園領主と仰ぐようになりました。999年の在地領主文春正の子孫が在地豪族に成長したのか、在地領主の交代があったのかは判っていませんが、文春正のように国司の干渉を武力で抵抗するような在地領主の存在が地方勢力の母体となったのかも知れません。



田中庄の範囲(昭和28年米軍撮影写真に合成)

写真:国土地理院

一つの私領が形成されつつあったことを示すものかもしれません。竹田北庄や糸井北庄などが点在する地域ですが、田中庄は一か所にまとまっています。

